

将来の最大目標は  
健常者大会への出場



# 磨き上げた泳ぎで 東京パラリンピックに 挑む

水泳部 長野凌生選手(文4)



2017ジャパンパラ水泳競技大会で力泳する長野凌生選手=2017年9月(写真提供:エックス・ワン)

192センチ、90キロの恵まれた体格を生かした、大きな泳ぎが特長だ。水泳部の長野凌生選手(文4)は、東京パラリンピックの水泳50メートル自由形(S13クラス=軽度の視覚障がい)とリレー種目(4×100メートル)への出場を目指し、多摩キャンパスのプールで日々、自らの泳ぎに磨きをかけている。8月25日開幕のパラリンピックまで約半年。長野選手に泳ぎにかける思い、将来の目標などを聞いた。(取材日=2月12日)



身振り手振りで泳法を説明する長野凌生選手

## 日本パラ水泳選手権で 自由形50、100の2種目 連覇

2019年11月の第36回日本パラ水泳選手権大会で自由形50メートル、100メートル(ともにS13)を前年に続き連覇した。50メートル25秒32、100メートル56秒42の日本記録保持者でもある。2018年10月のアジアパラリンピック競技大会では50メートル自由形(S13)で銅メダルに輝いた。「水泳を続けていてよかった。やっと国際大会でメダルが取れ、格上の外国人選手に勝てたこともうれしかった」と笑みを交えて振り返る。

「(全国大会の)決勝に残れるかどうか」というアスリートとして発展途上の

状態だった筑波大学付属盲学校の高校時代を経て、中央大水泳部に入り、大きく飛躍した。「高校時代と違って、泳ぎの技術面で自分を上回っている人が部内にたくさんいる。常に僕より速い人がいる環境でした」。水泳部のコーチの指導を受けながら、刺激を受け続けた中大の4年間だった。

### 「お手柔らかに お願いします」

パラリンピック日本代表の座を勝ち取るにはメダル争いに食い込む可能性のある派遣基準記録を突破することが重要で、そのためには自身の持つ日本記録の更新がまずは必要だ。代表選考

の対象となる試合で、持てる力をフルに発揮しなければならない。

1日に2～5キロを泳ぐという長野選手に課題を尋ねると、「試合のたびにプレッシャーから肩に力が入る。力んでしまうんです」と答えが返ってきた。試合会場に入り、ウォーミングアップまでは何ともないのに、いざスタート台に立つ直前になると、急に力が入ってしまうのだという。

しかし、重圧に打ち勝つための“秘策”も長野選手にはある。

「スタート台に左側から上がり、スターティングポーズを取ったとき『お手柔らかにお願いします』と声を発すること」

自分だけに聞こえるくらいの大きさの

声で口にする。これが、いつの頃からか行っているおまじないだ。以前にパラ代表選手を対象としたメンタル、ルーティン(決まった手順)に関する講義を受けた際、「何かおまじないを設けたほうがいい」とアドバイスをを受けて実行した。気合の入るような言葉を発すると、より力んでしまう気がしたため、この言葉を選んだという。

もちろんアジア競技大会のときも、日本記録を出したときも、おまじないを声に出した。日本記録を出したときには

「余計なことを考えず、ほかの選手や観客も気にならず、泳ぎに集中できていた」と話す。

## 卒業後も水泳に挑戦

アスリートとしての強みは粘り強さだ。練習がつらくても、やらないという選択肢は長野選手にはない。中大卒業後、社会人となった後もパラ水泳選手として活動を続ける。東京パラリンピックの先の目標は健常者と同じスタート台

に立つことだ。健常者大会の参加標準記録を突破するために、50メートルでは2秒以上の記録短縮が必要となる。

水泳部の仲間にもこの目標を伝えている。「お前が出るまで待っているぞ」と、水泳部OBで同じ自由形の塩浦慎理選手(イトマン東進)、坂井孝士郎選手(鹿児島県体協、塚口SS)らから声をかけられ、励まされた。

「ずっと水泳は続ける。やめるときは(やり切ったと)満足したとき」。長野選手の挑戦は続く。

### column

## 「自分の泳ぎは自分にしかできない自分らしさ」大事に

バスケットボールの元日本代表として世界選手権にも出場した父、洋さんの影響で、小学生の頃はバスケットボールをしていた。洋さんも身長196センチ。恵まれた体格は父親譲りだろう。先天性の弱視から小学高学年で次第にボールが見えにくくなり、筑波大学付属盲学校(中学・高校)では水泳部に所属した。高校時代に自己ベストの記録を出して「もう少し水泳をやりたい」と、実績と伝統のある中央大学水泳部の門をたたいた。

好きな言葉は「為せば成る」と、高い志を持つことを意味する「壮士凌雲」。「自分の泳ぎは自分にしかできない。人に勝つことも大事だが、自分らしくやろう」との思いから、「自分らしさ」を大事にしている。



## ながのりょう 長野 凌生

筑波大学付属盲学校卒業、文学部4年。パラ水泳の50メートル自由形25秒32(S13)、100メートル自由形56秒42(同)の日本記録保持者。趣味はスポーツ観戦、アニメ鑑賞など。小学生の頃からプロ野球の東京ヤクルト・スワローズのファン。

### 長野凌生選手の年度別記録

	50メートル自由形(S13)	100メートル自由形(S13)
2015年度(高校3年)	27秒43	1分1秒89
2016年度(大学1年)	26秒38	58秒63
2017年度(大学2年)	25秒65	56秒42
2018年度(大学3年)	25秒40	57秒02
2019年度(大学4年)	25秒32	56秒42

日本身体障がい者水泳連盟ホームページから。大学入学後の記録はいずれも全国ランキング1位。2019年度は2020年2月現在

# イベント運営、広報、

## サッカー「東京23FC」 ホームゲームを総合プロデュース

渡辺岳夫商学部教授の「ビジネス・チャレンジ演習/実習(サッカークラブ経営)」(明治安田生命寄付講座)を受講している私たちは2019年9月7日、東京都の江戸川区陸上競技場で行われたクラブチーム「東京23FC」のホームゲームで、広報・PRや試合開催に伴うイベント運営、会場周辺への店舗誘致などの活動を展開するという総合プロデュースを担当しました。サッカークラブの経営に実際に参画し、スポーツビジネスの現場で仕事をした私たちゼミ生3人が、その貴重な体験について報告します。



# 店舗誘致などに奔走

クラブ経営に参画

## 商学部「ビジネス・チャレンジ演習／実習」

Business  
Challenge

### イベント立案に知恵絞る 「ちびっこワールドカップ」 子供たちの笑顔に 達成感

清水葵(商学部2年)



私が「ビジネス・チャレンジ演習／実習」を受講しようと思ったのは、たまたま広報誌を見て講座が紹介されていることに気づき、スポーツビジネスにもともと興味があったため、面白そうだなと思ったことがきっかけです。

場内イベント班に所属し、ゲームの前座イベント「ちびっこワールドカップ」で、子供たちが実際のピッチで試合をしたり、サッカーボールを使ったゲームをしたりするイベントの企画・運営を担当しました。「第一に子供たちが国際交流をしつつサッカーの楽しさを知ることができる、なおかつ集客力があるイベント」を目標に、班員全員でたくさんのお話し合いを重ねました。

一番難しかったことはイベントの企画内容を決めることでした。子供たちが交流する中でサッカーの楽しさを知るという目的を忘れがちになり、集客ばかりに目が行ってしまい、なかなか内容が決

まりません。悩んでいたとき、周りの方々のアドバイスで、もう一度目的を確認し、達成するための戦略と戦術を考え直しました。

順序立てて考えると、目的からずれて



子供たちの歓声がピッチに響いた

いた部分や、やらなければいけないこと  
が見えてきたりして、何とか企画内容が  
決まりました。しかし1つ決まれば、また  
新たな課題が生じ、本番までは常に課  
題解決、試行錯誤の繰り返しでした。

## 事前準備、当日進行… 想定外の連続

本番直前まで準備に追われ、当日も  
事前に組んでいたスケジュール通りに  
進行せず、想定外なことばかりで一瞬た  
りとも気を抜けません。ただ当日は、200

人を超えるさまざまな国の子供たちが  
集まってくれ、元気で楽しそうに一生懸  
命、ピッチを駆け回る姿を見たら、それ  
まで大変だったことをすべて忘れ、何と  
も言えない喜びと達成感、充実感がわ  
いてきました。

当日の片付けが全て終わるまで、とて  
も長い道のりでした。夏休み返上で集  
まって打ち合わせをしたり、江戸川区に  
も10回以上足を運び、集客のためのチ  
ラシを配ったり、イベント中もイレギュ  
ラーなことばかりと、想像以上に大変な  
ことが多かった。目標の5000人に届か

なかったし、反省点も山ほどあります  
が、来場して下さった方々の笑顔や  
「ありがとう」という言葉を聞き、半年間  
必死に頑張ってきてよかったなと心か  
ら思うことができました。

もちろん周りの人たちの支えがあつて  
こそ経験できたことです。東京23FCの  
方々をはじめ、協力していただいたすべ  
ての方にとっても感謝しています。これか  
らの学生生活では、この経験を生かし、  
さまざまなことに全力で挑戦していきた  
い。そして将来は、誰かを幸せにできる  
仕事に就きたいと考えています。



ちびっこワールドカップに参加した子供たち

## 広報班でPR動画作成 「仕事は支え合い」 渡辺先生の言葉を実感

牛田実保(商学部2年)



私がビジネス・チャレンジ演習／実習を受講したのは、姉が渡辺岳夫先生のゼミ出身だったことがきっかけでした。渡辺先生の授業を受けてみたいと思い、説明会に足を運びました。

もともとサッカーや経営に興味があるわけではありませんでした。大学生活の中で何か一つのことを頑張りたいと思っていました。

講座では「5000人集客」という大きな目標に向かって、受講生一人ひとりが主体的に行動しており、そこにとても魅力を感じました。

私は広報班の所属になり、大きく4つのことを担当しました。

- ①東京23FCのPR動画作成
- ②チラシ、ポスターの作成
- ③「Mr.&Miss Chuo Contest」のファイナリストとのコラボレーション
- ④「ビジネス・チャレンジ演習／実習」独自の東京23FC 応援用SNS(ツイッターとインスタグラム)の運営

その中でも、私が特に力を入れたのは、①のPR動画作成です。撮影内容や撮影場所の確保、出演者との交渉など、わずか2分弱の動画を制作するため、何十人の方に協力していただきながら完成に至りました。

### 「人とのつながりの大切さ」学ぶ

私にとって大変貴重な経験になったとともに、重要なことを学びました。

それは「人と人とのつながりの大切さ」です。

動画をどのような内容にすればいいか、出演者はどうやって見つけるのか、撮影場所はどこがよくて、どうしたら撮影の許可をもらえるのか、音楽や写真の著作権の問題にはどう対処すべきか。動画作成の過程でたくさんの課題が出てきました。

一つひとつ解決するのはとても大変でつらかったこともありましたが、一緒に頑張ってくれる広報班の友達、渡辺先生の期待に応えたいという気持ちや、作成に協力してくださっている方々に迷惑はかけられない気持ち、いろいろな方々の支えがあったから最後までやり





通すことができましたと思います。

公開時期が遅かったこともあり、動画の視聴回数はあまり伸びませんでした。内容は素晴らしい動画だったのに、より大勢の人に見ていただけなかったのは悔しいですが、東京23FCを応援する地域の子供たちが「見たよー!」と声をかけてくれ、うれしい気持ちでいっぱいになりました。そして、支えていただいた方々に、今度は私が何かお手伝いしたいと自然に思えました。

「仕事は支え合いなのだ」という渡辺先生の言葉が実感できた瞬間でした。

「ビジネス・チャレンジ演習／実習」の



浅草のサンバカーニバルではポスター持参でPRした

経験から、私は将来、広告に携わる仕事をしたいと思っています。現在、動画作成にあたり撮影、編集など多くのことで協力してくださった会社で、アルバイトをしています。夢に向かって少しでも学ん

でいきたいと精進中です。

2年生の夏休みに貴重な経験をし、大切なことを学ぶことができました。興味のある方はぜひ講座の説明会に足を運んでみてほしいと思います。

Business  
Challenge

## 飲食班 10店舗の“誘致”に成功 東京23江戸横丁 ～アジアンフードフェスティバル～



藤本友香  
(商学部2年)

私は飲食班に所属して活動を行いました。私を含めた飲食班5人のミッション(任務)は、試合当日のイベントの14時半開始に合わせ、試合終了後の20時頃まで試合会場のスタジアム入り口前に出店する飲食店10店の「キッチンカー」を誘致するというものでした。

出店してほしいと判断したキッチンカーのホームページ、SNSなどを通じて、店主の方に説明してお願いするという流れで、この“誘致活動”が私たちの

一番大切で大変な仕事になりました。

まず、出店をお願いしたいキッチンカーの選定に苦労しました。イベント全体のテーマ「アジア」から、キッチンカーが並ぶスペースを「東京23江戸横丁～アジアンフードフェスティバル～」と名づけ、キッチンカーはアジア系フードに限定しました。

アジアの国の料理で、かつ子供から大人まで抵抗なく楽しめる料理を見つけなければなりません。また、普段の観

客動員数は多くて1000人程度で、今回の集客がどの程度になるか明確でなく、売上額を想定しにくい状況での出店依頼には苦心しました。

### 「どうしても成功させたい」モチベーションは強い気持ち

23店舗に声かけし、最終的に10店舗の誘致に成功しました。依頼しても断ら

れることも多かったですが、私たちのモチベーションとなったのは「どうしても9月7日の試合を成功させたい」という強い気持ちでした。

ビジネス・チャレンジ演習/実習に挑戦したいと思ったのは、高校2年の夏休みに、中央大学のオープンキャンパスに参加したからです。当時、学問としては商学部は漠然と興味があり、将来は何かスポーツに関わる仕事ができたいなと思っていました。オープンキャンパスでこの授業のことを知り、スポーツビジネスという分野を知り、絶対にここで学びたいと思うようになりました。

商学部の専門科目を勉強しながら、実践的にスポーツビジネスを学べるといのは私の将来の夢にとって絶対に力となる魅力的なものでした。

半年間の活動で一番に学んだことは、仕事をしていく上で「連携」が大切だということ。当たり前かもしれないけれど、大切さを改めて実感しました。

自分の班の活動だけでなく、他の班のメンバーが何を考え、何を実行しようとしているのかを把握しなければ、イベント全体を上手に展開させていくことはできません。出店を依頼した店長さんから「ほかにどんな企画があるか」「どんな人たちをターゲットに、何をして、何人くらい集める想定なのか」などの質問をされることがあり、あいまいにしか答えられず、自分の班しか見えていないことに気付かされました。

## 店主からの お礼の言葉に安堵

また、仕事のやりがいを感じ取ることができました。当日予定していた1店舗が急に来られなくなり、ポツンと1店だけ少し離れた場所で営業することになってしまった店舗がありました。その

店舗だけ売り上げが伸び悩んだため、<sup>きゆうぎよ</sup>急遽、観客席で注文を取り、商品を届ける今流行の「ウーバーイーツ」のような代行サービスも行いました。

売り上げが順調に伸びた店舗が多く、店主の方から「この試合に誘ってくれてありがとう」とお礼を言われたときは、喜んでいただけて良かったとほっとしました。実践的な活動だからこそ、ハプニングをとっさに解決したり、取引先からお礼を言ってもらえたりといった体験ができたと思います。

ただ漠然とスポーツに関わる仕事がしたいと思っていただけでしたが、今回の体験を通して、その仕事の中身を少し知ることができ、将来の選択肢を増やせたと思います。大学生活の残り2年間でさらに選択肢を増やせるように、学んだり、体験したり、積極的に動いていきたいと思っています。

# 昨季のホーム最多動員数を記録 2年生以上のゼミ生26人 5班に分かれ半年間活動

## ビジネス・チャレンジ演習/実習(サッカークラブ経営)

2年生以上の商学部、経済学部の学生26人が「場内イベント」「場外イベント」「広報」「飲食」「スポンサー」の5つの班に分かれて活動。大勢の観客を動員して試合を成功させるため、一から企画を考え、昨年4月から夏休み期間を含めた半年間、ビジネスの現場で仕事をした。

東京23FCは江戸川区のサッカークラブで、現在は関東1部リーグからJリーグへの参入を目指して活動している。江戸川区は東京23区の中でも在留外国人が新宿区に次いで2番目に多く、多文化が共存している町であるということから、学生たちは地域コミュニティーにお

ける融和を大切に、5000人の集客を目標として「アジア×キッズ・フェスティバル」というテーマを掲げた。試合当日の観客動員数は1633人と目標には及ばなかったが、昨季のホームゲームの最多動員数を記録した。

# 学生記者に なりませんか?

『HAKUMON Chuo』は  
中大生が取材・編集する  
大学広報誌です。  
現在、学部在生を対象に  
学生記者を募集しています。

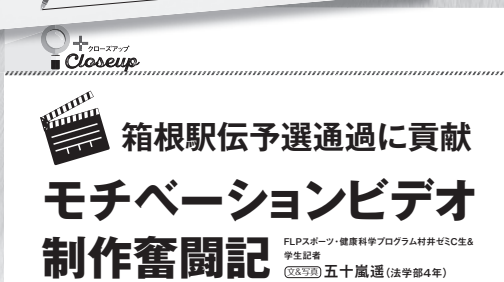
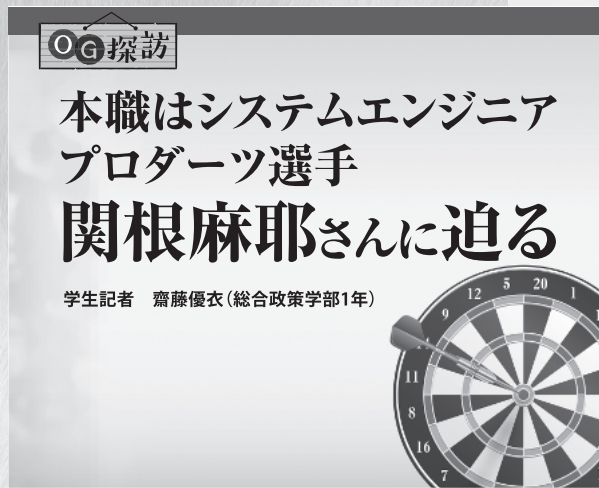
- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。



**OG探訪**  
剥製標本、骨格標本を請負製作する  
内田晃氏は中大理工学部卒  
保存状態良ければ「100年、200年は大丈夫です」  
学生記者 片桐将吾(法学部4年)



憧れの報道番組キャスター  
中大4年生が日テレ  
「news zero」で奮闘中  
学生記者 山田 亮太郎(法学部4年)



【お申し込み・お問い合わせ】

中央大学広報室『HAKUMON Chuo』 編集担当：北村豊 Phone：042-674-2048(直通) E-mail：hc@tamajs.chuo-u.ac.jp

陸上競技部長距離ブロック  
一井康介選手(文4)



チームの、  
4年生の思い乗せた  
「魂の走り」

# 「お前も何か声をかけてやってくれ」 「僕はちょっと、もう何も言えないです」

伴走する運営管理車の藤原正和監督と、副務の岸俊樹選手(総合政策4)はそんな言葉を交わしていた。チームを裏方として支えてきた岸選手は同学年の二井康介選手(文4)の快走に心動かされ、言葉を絞りだせない。指揮官も胸に迫るものがあった。

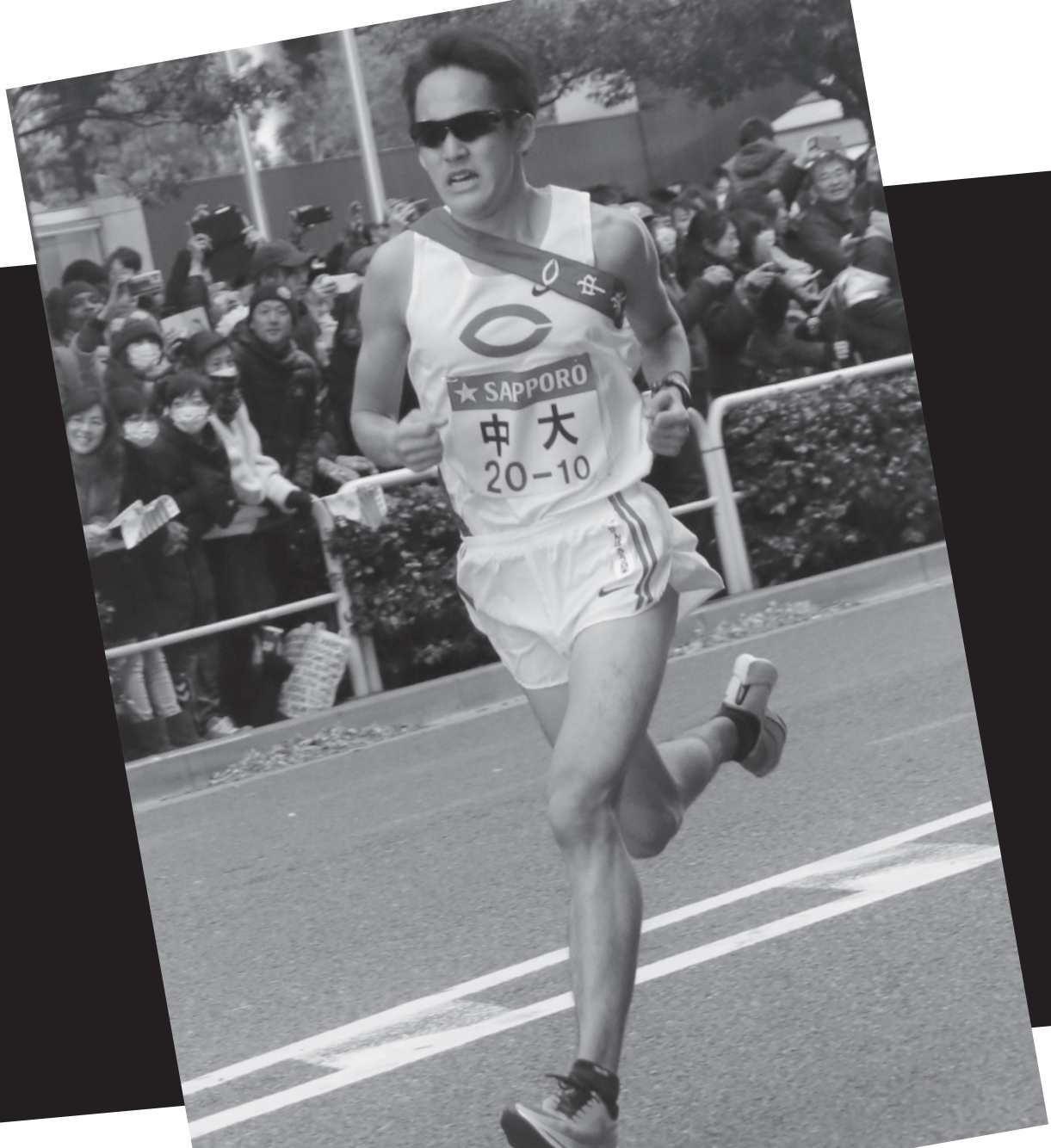
正月の箱根駅伝で、中大4年生唯一のエントリーだった復路10区の二井選手。ゴールの大手町が近づくと、運営管理車は選手の行く手とは違うコースにそれていく。車内から最後の励ましを送る機会だった。

## 「箱根で走る姿を見たい」 母の思い

大学生活で悲しみや苦悩と向き合いながら、秘めた素質に鍛錬を重ねて、区間6位(1時間10分18秒)の成績でフィニッシュした二井選手を、藤原監督は「不死鳥のような男の魂の走り」と称えた。タイムは中大新記録だった。

1年時に1万メートルで28分台を記録、周囲の期待を背負ったランナーだったが、その後は走りに気持ちが乗っていかなかった。2年の7月に休部してチームを離れ、それでも3カ月後に復帰を決意する。病気でのちに帰らぬ人となった母、順子さんの「康介が箱根で走る姿を見たい」の言葉が背中を押してくれた。

箱根直前の昨年12月には病院で双極性感情障害と診断された。「何か人間性の問題かと思っていた。病気なら治せるはずだ」と、気持ちを前向きに変えられたことは大きかった。12月の記録会や練習では、藤原監督が「パーフェクト」とたとえる走りを見せ、たすきをつなぐ10人に名を連ねた。



(中大スポーツ新聞部提供)

## 最初で最後の箱根 10区の中大新記録

藤原監督から「追い上げるなら二井しかない」と託された最終10区。米国遠征とともに研鑽を積んだ9区の大森太楽選手(文3)からたすきを受け、走り出すと、すぐ前の拓殖大の選手の背中が近づいてきた。「早く追いつきたい」とオーバーペース気味に突っ込んだが、「1年生の頃の走っても疲れないう感覚が(レース中に)ずっとあった」。大声援を受けて快走し、「楽しかった」と気

持ちにも余裕があった。

最初で最後の箱根。大手町では、田母神一喜・長距離ブロック主将、舟津彰馬・駅伝主将らに迎えられた。母の遺骨を入れたペンダントを背中中のゼッケンにしおぼせ、一緒に走った23キロだった。

「監督とコーチが(いったんチームを離れた)僕を拾って面倒をみてくれた。こいつを指導して間違いなかったと証明できたことがうれしい」と胸を張り、信頼してくれた藤原監督と花田俊輔コーチ、山本亮コーチに感謝した。

箱根の翌日から新チームが始動した。4年生が退寮し、新入生が一人、また一人と入寮する。

「僕は後輩にはとても申し訳なく思っていて、自分のことで精いっぱい、4年生として全然(チームを)引っ張ることができなかった。後輩たちには力がある。実力が下の僕ができたこと(中大新記録)をできないはずがない」

たすきは、10区の二井選手から、その先、そのまた先へとつながっていく。

## 「箱根を走るフォームをしている」 小学時代は走り幅跳びが専門 中学で長距離転向

小学校時代の二井康介選手は、実は走り幅跳びが専門だった。地元の小学生の大会で上位の成績を挙げている。転機は中学入学後。1年生の二井選手が走り幅跳びの練習をする姿を見ていた当時の陸上部顧問の男性から、長距離走への転向を勧められた。

理由は「箱根(駅伝)を走るフォームをしている」。おそらくは助走時の足腰のばね、しりの筋肉の付き方などが箱根向きと思われたのだろう。転向が正しかったことが今回の走りでも証明されたといえる。

### に い こう すけ 二井康介選手



神奈川・藤沢翔陵高校卒業、文学部4年。自己ベストは1万メートル28分56秒、ハーフマラソン1時間4分54秒。最初で最後の走りとなった箱根駅伝の記憶を胸に、陸上競技の一線からは退く。

# 「何も言うことのない走り」

「10区を走ってもらう。(最終区で)追い上げるなら二井しかいない」

藤原正和監督は昨年12月28日、二井康介選手にそう告げた。病気との因果関係は分からないとしながらも、12月になってからの記録会や練習で、二井選手の表情が豊かになったと感じ、「走る雰囲気があった。不安感なく走っている」とみていた。23キロという長丁場だが、4年生のプライドでやってくれれば、「適材適所」で抜てきした。

勝負どころでも、指示を出す前に二井選手が自

身の判断で動いていった。力強く頼もしい姿に、「何も言うことのない走りだった」と監督も目を細めた。

藤原監督は「彼は同じ世代の中で日陰を歩いてきた選手ですが、練習で先頭に立って引っ張る姿を見ている後輩たちから、間違いなく信頼され、慕われていると思います」と語り、「土台は陸上競技を通して十分にできた。個性を生かせる場で粘り強く生きて行ってほしい」と励ましの言葉を送っている。

## 藤原正和監督

